仏教学の重み

片野道雄

今年度、仏教学科の第二学年に進まれた諸君は、五月の始めの調査によりますと、一三九名というように報告を受けております。めでたく進級されまして、本学仏教学会にご入会されましたことに対して、歓迎の意を表したいと思います。今年度も第二学年の諸君は、専門分野の主要科目として昨年度に引き続いて、それぞれ演習を受講されて、仏教学の基礎的な学びを身に付けられることであります。

ところで、今年度も、仏教学会にお迎えした歓迎の意味の一端として、このような形でお話しをするということになりました。早速タイトルを提出せよとのことでありました。許された時間、あれこれと考えたのでありますが、このような講演題目に致したことであります。

そこで、お話しを進めるにあたりまして、どのようなことが思い浮かんだのかと言いますと、本学の仏教学の歴史についてでありました。本学で仏教学という名乗りを挙げたのは一体いつごろからであったであろうかというようなことが、先ず念頭に浮かびました。そして、どのような先輩たちがどのような課題にたち向かっておられたのであろうか、ということでありました。いわゆる、本学の仏教学の歴史の重みであります。それとともに、もう一つの思いといたしまして、そういう仏教学の流れに置かれている私たちは、一体どういうことにお互いに心しなくてはならないのであろうか、という仏教学に携わる者の身の引き締まる課題であります。この点はそれぞれの関心によって違う

かも知れませんが、皆さん方も仏教学の世界を歩むにあたって、基本的に一体どのような事柄を受けとめていったらいいのか、そのような問題意識をも是非とも持って頂きたい。そのようなことなどをめぐって、ここに「仏教学の重み」というタイトルを提出したことであります。

その第一番目の点でありますが、本学において「仏教学」という名称で名乗りましたのは、一九二〇年ころであります。それ以前は「余乗」という言い方をしておりましたけれども、広く仏教を学として世界に解放していくんだという、そういう大胆な発想が仏教学という学の名乗りの許でなされてきているようであります。一九二〇年でありますと、今から七十八年も前のことであります。永い歴史の経過には色々なことなどが予想されるかと思いますが、少なくともその開設当時の仏教学において何が託されていたか、いささかでもその一端が確認できたらと思うことであります。

それも、当時のことが記録によって伝えられているのでありまして、その一つとして、諸君たちに配付されています学生手帳の始めの方に掲げられてあります。あまりその部分は確かめる機会はないのでないかと思いますが、その手帳の二ページ目に「開校の辞」があります。三ページ以下には「大谷大学樹立の精神」という文面が見られます。「開校の辞」は申すまでもなく、清沢満之初代学長の言葉であります。特にその中でも、大切にして伝えられてきている事柄は、「我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に」というような表現をもって、本学での学びの基本は自己の信念の確立であり、「それを他に伝える」ということであると告示されているのであります。

そういうことなどが当然背おわれ、踏まえてのことと拝察するのですが、一九二五年の佐々木月樵学長の挨拶の言葉が「大谷大学樹立の精神」であります。これも非常に輝かしい文面でもって大谷大学のあるべき方向性が見定められようとしております。その「樹立の精神」の中には、まさしく仏教学というものはこうあるべきである、こういう願いの許にあるのだ、ということを、また、本学の仏教学は大谷大学でこういう位置づけのもとに置かれていて、そ

して、このように仏教学というものは歩むべきである、という趣旨が表明されているのであります。

その委細については、みなさん方それぞれの観点からその樹立の精神を「開校の辞」と併せて読んで頂けたらと思います。少し余談になりますが、その「樹立の精神」の中で今日と重ねて読むとそれなりの興味を提供するものもありまして、その一つに、ドイツという国は学の自由を尊び、フランスは資格を得ること、イギリスは紳士を造る、アメリカは実益を重んず、というような大胆なその当時の見方が披瀝されております。

さて、その「樹立の精神」の中で仏教学の営為として重要な言葉かと思われるのは、先にも述べますように、その第一として、仏教を学界に解放したことであると言われていることであります。そして、それがいつの間にか国民一般に普及するという、そういう在り方であってほしいというようなことがこの「樹立の精神」の中で述べておられ、それは一つ光った文面であろうかと思います。仏教を学界に解放するという視点をどのように受けとめるか、難しい課題が含まれいるかと思いますが、その学は決して単なる知識ということではなかろうと思われます。仏教の学びを通じて、あるいは、仏教への真剣な尋ね方を通して仏教というものを学界に解放していく、それは知識では収まらない、人間の行き方に係わる深い事柄が意図されているとも窺われるのであります。

ところで、当時、佐々木先生のこの大谷大学、あるいは、仏教学に対する大きな願いが聞き届けられ、好意的に引き受けて下さっている先生について触れなくてはならないであろうと思います。その頃、日本における京都学派の哲学の大先輩であります、西田幾多郎という先生は、佐々木先生の目指すものは世界的な仏教研究のセンターたらしめようという理想を実現しようとするものであったんだ、というように、西田先生は佐々木先生の目指されるものに対して、非常に期待の込められた言葉で伝えて下さっているのであります。あるいは、鈴木大拙先生もまた、佐々木先生のそういう情熱に絆されて、東京においてすでに地位、役職を得ておられましたけれども、わざわざ本学大谷大学へお迎えできたことでありました。

鈴木先生は非常に多くの業績が見られるのでありますが、その中で『入楞伽経』をその原典であるサンスクリット語やそのチベット訳、ならびに、漢訳を駆使して原典研究をものせられて、さらには、禅とか浄土思想を通じて仏教を世界的な視野における仏教として、特に、アメリカを中心にして紹介されたことであります。そのような事例を顧みますとき、仏教学の歩みという点でも多々点検しなければならないことがあるのでありますが、ともかく、大谷大学は、その仏教学の名乗りの時点から大変な大学としての志願が実現せられようとしているのであります。それ以来、七十余年という経過を経てきておりますが、そういうことなどを思いますとき、私どもの抱えている仏教学は深い願いのかかった歴史の重みを感じざるを得ないのであります。

しかし、ここでさらさら伝統に溺れよなどと述べているのではないのでありまして、そういう大きな深い背景というか、願いが重ねられているということは、やはり、われわれにとって非常に力強いものを感ずるのであります。われわれの仏教学の取組みに勇気づける事柄として、また、ある時期、ヨーロッパの東洋学の関係者から、仏教を含む東洋思想というものが世界精神史の上に喚起されようとしていたことであります。特に、近代の物質文明、東西の冷戦という社会状況の中にありまして、あるいは、東西文化の交流ということでもありますが、東洋の文化とか精神、とりわけ、仏教思想というものが顧みられなくてはならないことが、しきりに、ヨーロッパの東洋学者たちによって提唱されていたことであります。そういう提言をしている方々の中にはクリスチャンはもとより、牧師さんの東洋学者もおられるのであります。仏教というものを含めて、東洋思想は現代という世相において大事な役割をもっているんだ、という言い方で提言されているのであります。現代の行き詰まった時代状況において、解毒剤として東洋の仏教の果たされなくてはならないことがそこには見通されているのであります。

近年、そのような近代文明に対する海外からの反省の声が、印象として小々トーンが落ちているかのように思われますが、今なおそれらの識者からの要請は聞きとどめておかなくてはならないのであります。

そこで、国内に眼を向けて、最近、話題となっております書物の二、三について仏教学の視座から管見することに致したいと思います。三年ほど前でありましたか、一時の流行であったかもしれませんが、『脳内革命』（②春山茂雄、サンマーク出版、一九九六）という書物が、また、ここ最近には『大河の一滴』（五木寛之、幻冬舎、一九九八）という本がよく読まれているようであります。両方とも折々にものせられた文章を集録されたもので、読みやすい部類に属するかと思いますが、鋭い視点を提供しています。『脳内革命』で印象に残ったところを述べますと、左の脳と右の脳とのその作用のごく簡単な特色として、われわれの日々の生活や学習して積み重ねている事柄は左の脳を使っている、そして、一方の右の脳は五百万年前からの遺伝子を蓄えていて、十数年の蓄積ではなしに、人類誕生以来の知恵が右の脳にはあると言われています。そして現代は、左の脳ばかりを用いていて、非常にストレスが溜まっている。もっと右の脳を使うようにしていくことが大切であって、その右の脳を使うにはプラス思考、プラス発想が有効であると言うのです。

一方、最近非常に読まれていることをよく耳にするのですが、その『大河の一滴』というのは、著者ご自身の人生体験を通じて、すなわち、人生の苦しみと絶望の崖壁にあって、その事実にあきらめ、覚悟するということでありましょうか、人生の苦しみ、悩みを避けようとするのでなく、そこに身を置くのであるというところからのマイナス思考によって、自分というものを見据えていく生き方を述べているかと思います。そういうマイナス思考に視座を置くとき、却って真の希望と生きる勇気が湧き、人生の立ち上がりが容易となるという指摘もあったかと思います。貴重な人間理解の体験が綴られております。

いささか、このような二つの随筆を通じて、プラス思考とマイナス思考を見たことでありますが、ここでは、それらの人間の現生存の捉え方の善し悪しを述べるつもりはありません。それらはそれなりに読者に説得力をもっているように思われます。ただここで、考えようとしますのは、一体、仏教学を通じてそれらの思考についてどういうこと

が言いえるのであろうか、ということがここで私自身、問題として起こってくるのであります。

さらに、もう一冊の書物をとり上げたいと思います。それは本学の国文学の、最近お纏めになられた村井英雄先生の「日本を知る」シリーズの『司馬遼太郎』（大巧社、一九九七）であります。そこに紹介されています司馬さんの提言されている言葉でありますが、日本の明日を非常に危惧しておられる文面の結びの所で、明日の日本を建設的に考えていくとすれば、二つのことが心されなくてはならない、と述べておられるのです。その二つは、気概のある人であり、そして、私心のない人を挙げておられます。そういう二つの要素を持ちあわせた人々によって明日の日本は背負われていくべきである、というように、司馬さんの提言を村井先生は紹介しておられます。今日、あるいは、現代という状況を考えますとき、どのような方向に向かって走っているか判らないというのが現況でありまして、この混迷する時代社会において、司馬さんは、これまでの日本の歩みを振り返って、志と心は日本人にとっての誇りであるという信念からでありましょうか、明日の日本を救うという、期待されるその一つの視点として、気概とおっしゃっている。それは志ということでもありましょう。志をもった人が一向に現れないことへの警鐘でもありましょうか。また、私心のない人、仏教の上で了解しますと、無我にもとづく無心ということでありましょうが、私心というものを無にしていく人、それら二つの事柄を特に司馬さんは生涯を通じて確かめつつ、重視すべき示唆を述べておられるようであります。

その中の、志ということはお互いにそれぞれ夢を託しながら邁進していく、非常に勇敢な前進をもたらす心の躍動であろうとも思いますが、一方の私心のない人、そのような無心の人ということになりますと、何かそこにはわれわれの仏教学の取り組んでおりますことへの期待といいますか、仏教による確かめが要請されているようにも私には思われるのであります。現代の混迷を引き起こしています要因に、物質本意の志向とともに、余りにも他を省みない私心の一辺倒に陥っていることが指摘されているのであろうと思われるのです。世界や日本の昨今の色々の事件や事柄

を踏まえても、私心が常に中心に動いていて、それが国であったり、民族であったり、宗教であれ、個人的な次元であれ、それが暴走していて、現代はある側面として、人としての道を見失い、混乱しているように受けとめられるのであります。そのような私心の克服ということを、特に仏教の上で確かめるとすれば、先人は、初期仏教以来、人類の運命はわれわれの心の奥底の我がよく克服せられているかどうか、という点で心せられてきた、と述べておられたかと記憶しますが、それは釈尊以来全仏教の歴史の歩みの上で、確認せられてくることとも思われます。

そのことに因んで考えるのですが、改めて述べるまでもなく、阿含の仏教を通じて、三法印とか四法印で言われています中に、無我ということが一つの旗印として受けとめられてきております。インドの仏教も次第に時代を経て、部派仏教とか阿毘達磨仏教、あるいは、大乗仏教や密教に、他方、南方への仏教展開、中国仏教や日本仏教、あるいは、チベットへの仏教展開の広がりの中にありまして、無我という仏陀釈尊の理念がやはりその基本として受け継がれてきているのであります。本学の仏教学におきましては、それぞれの分野にそれぞれ造詣の深い先生かたがお見えですので、大いに利用して学びを深めて頂きたいのですが、インド学分野に進んでおられる方も含めて、それぞれの関心の許での研究にありながら、より基本的な課題として無我というものが如何に展開しているか、ということも視野に置かれることは非常に大切なことであろうと考えております。

たとえば、部派仏教の一つの姿として阿毘達磨仏教という歩みが見られますが、そこにおける無我の思想が予想されます。そして、それはそれで大切な学びの分野でありますが、そういう阿毘達磨仏教を背景にして、また、大乗の仏教は展開していると考えられます。その大乗の仏教は大乗としての無我の仏教展開として大きな意味あいを持っているのであります。そこで、先の司馬さんの私心のない人といわれるのは無我を実践する人ともなろうかと思いますが、大乗においてはそれがどのような点において確かめられるかといいますと、無自性、空、或いは、空性・シューンニャターという言葉によって改めて思想的に展開しております。無我という釈尊の思想を、その釈尊の意図を尋ね

つつ、空性という用語をもって明らかにしていこうという点が窺われるのであります。大乗としての空性思想は『般若経』以来と言えますが、また、それら仏典の意図を深く探求せられようとして著作された当時の仏教者のテキスト類、すなわち、ナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、アサンガ、ヴァスバンドゥなどの論書も重要な資料となります。空、あるいは、空性という言葉は日常的な語感で受けとめるということは難しいのでありますが、その空性というのはある論書におきまして、縁起しているもの、関係性にあるものと述べています。空といっても決して虚無性を言うのではない。また、単に何も無いというような空っぽということではなく、経験世界において二元的に物事を捉えている人間の分別にあって、二つに分けたものが、実は、それぞれそれ独自に有るのではなく、互いに関係しあって在りえているという縁起思想を通して空性という用語が用いられているのです。それは大地の地平とでも言えるかと考えますが、虚無的ではなく、もっと大きな地平としての人間存在の事実を表現しようとしているかと思われます。

無我が空性という確かめを通して提起されてくるものはわれわれの現生存の在り方に係わることでもありますが、この空性はエンプティネスのほか、ゼロネスとも言われます。ゼロの概念は空性からきていると言われますが、そこには、プラス発想あるいはプラス思考でもなく、また、マイナス思考でもない、仏陀正覚の知恵の世界が窺われてくるのであります。そういう知恵の世界は縁起が如実に知見されていくはたらきにおいて実効せられるのですから、プラスに捉えたり、マイナスとしての捉え方が無意味になってくるのでありまして、その意味から仏陀の知恵はゼロ思考とも言えるのであります。

司馬さんの「私心の無い人」は私の了解から推測しますと、「ゼロ思考に裏打ちされた人」になるのであります。ただここで注意しておかなくてはならないのは、ゼロ思考ということは私の思いで、あるいは、私の考えでゼロであるというのでは勿論ないのです。仏陀の正覚の知恵の眼（仏智）を通じて私たちの現実を見直すと、それは互いに関係している、縁起である、ゼロであるというように確かめられてくるゼロ思考ということであります。

従って、プラス思考、あるいは、マイナス思考によってより強い人間の生き方が模索されているのですが、プラスとかマイナスということは人によって種々でありまして、人間の現生存の地平とはなりえないのであります。いわゆる、仏智にもとづくところのゼロ思考というものが現代という時代状況にあっても極めて重要な課題として改めて確認されなくてはならないのであります。あるいは、このようなゼロ思考を通じて、自己とは何かという確かめも必然的に問われることにもなろうかと思います。ゼロはプラスでもないし、マイナスでもない。また、よく耳にします、「百を求めて、ゼロにしない」というゼロの意味でもない。難解で不可解な用語ではありますが、仏教の学びの一つの要として、それを縁起の思想と併せて確かめていただいたら、というようにも思われることであります。司馬さんの警鐘からしますと、その様なことに心せられるということは明日の日本が思考されていくことにもなるのでありましょう。そんなことなどが思い浮かぶのであります。

すでに時間がきております。終わりたいと思いますが、少し締め括りをします。始めにも申しましたように佐々木月樵先生は、本学の仏教学の展望として、仏教の学びを通して仏教を学として学界に解放していくことをお考えになっておられました。さらに先生はその言葉の結びのところで、各自、純真の人間となって頂きたいと願いを込めて語っておられます。純真にして、本当に自らの人間なるものを受けとめていく、純真な人間になって欲しいことを、その「樹立の精神」の終わりの方では述べておられます。そのような佐々木先生の言葉をも念頭に置きつつ、これから三年間、仏教学の輝かしい中身を受けとめて頂きたい、また、われわれのこれからの取組が自分自身の問題解明だけにあるのではなく、世界や人類の問題と無縁のものではない、そんなことなどが切に思われることであります。ここに仏教学の歴史の重みを痛感しつつ、また、仏智にもとづくゼロの発想、ゼロ思考ということを確認するなかで、現代における仏教の役割の重みというものも、そこに出てくるのでないか、そのようなことで話しを進めてきたことであります。

諸君たちを大谷大学仏教学会にお迎えしまして、歓迎の第一部としての記念講演はこれをもって終わらせて頂きます。ご静聴ありがとうございました。